

装備のベーシック・ミニマム③

スキー場で落とした時はついに見つからなかった。アブミを掛けかえようとしたら、最下段のナイロン・ロープの端が跳ねて、パシッと顔に当たり、急に視界が狭まって遠近感がつかめないホールドを半ば手さぐりしながら登ることになった。これから出発、というときに氷の洞窟で落としてしまい、息を殺して雪の上に這いつくばった。奇跡的に見つかったときには、これから先の行動を断念しかけていた相棒が、私より大喜びした。富士山の五合目では、風と土埃に泣かされた。コンタクト・レンズの話である。時には、うろこが落ちるようにポロリと落ちてしまうこともあるが、私にとっては、目の中に入れても痛くない(?)ほど大事な日常生活のベーシック・ミニマムである。しかし、登山装備のベーシック・ミニマムには入っていない。今回は登山装備のベーシック・ミニマムその③である。

私の登山

19

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

ワタシと登山

どんな山がやりたいんだ?



天気さえよければ……(2015年8月の中央アルプス烏帽子岳山頂で)

り……。軍手と見分けがつかず、スベックからいえば、はるかに軍手よりも高い機能を持つているけれど、ベーシック・ミニマムとしては軍手、プラス防寒用の手袋をザックに入れておきたい。軍手は行動中、やぶを漕いだり、枝をつかんだり、調理時の火傷防止など、手の保護や作業用に重宝する。最近では化繊のものがほとんどだが、綿のものがあればなおいい。綿であれば、かつては軍手をほぐしてキャンドルの芯にして使うようなこともあったのだけれど、そんな時代ではなくなった。濡らさなければ、多少の防寒にも役立つ。ただ、軍手とは別に、防寒用の手袋も

持っていること。フリースなどより、濡れても保温性の高いウールの手袋がいい。雨に打たれたり、標高の高い稜線などで行動する時に、冷えて手の感覚がなくなるとピンチである。無雪期でも必ず一双は用意しておくこと。



雨具

雨具。山では「濡れること」は極力避けたいことのひとつ。そのためには雨具が必携の装備だ。上下セパレートのカップと折りたたみ傘。どちらかではなく、両方を持つていこう。ゴアテックスが初めて高価だった頃(今でも決して安くはないが)、苦労して手に入れたセパレートの雨具。濡らすくらいなら自分が濡れた方がまし、やっと思う気になった時には、長年、大事に畳んで持ち歩いていてできた「折り皺」から雨が沁みるようになっていた、みたいな本末転倒の時代があったが、最近はずいぶん蒸れにくく浸みにくい素材のカップは普通になってきた。でも、素材が格段に進化したといっても、パーフェクトではない。やはり濡らさない、濡れない工夫が必要である。気温が高ければ、傘をさして、上着のファスナーを開けるとか、フードを外すとか、上着を脱いで雨具のズボンだけ着け



帽子

帽子。ハットでもキャップでも個人の好みだが、通常は日よけ、雨よけ、虫よけ、防寒、防風など季節によって、いろんな役割を果たしてくれる。同時に、頭に落石を受けても、帽子が力をそらしてくれる。軽いのがいいけど、頭上に張り出した枝に頭を直撃するのをまぬがれたとか、緩衝材になってくれたなどの例もある。私たちが使っている計画書の装備欄には「帽子&目出帽」とプリントされている。目出帽というのは、最近ではバラクラバと呼ぶらしいが、映画やTVで銀行強盗などが顔を隠すのに使っているあれである。主に冬季に頭部の防寒に使われる。最近ではインナーとかアウトターとか細分化され、それぞれ素材も厚さも違うものが出てくる。あるいは帽子やネックウォーマーとフェースマスクを併用するような使い方もされるが、ここでは薄手の目出帽でいいだろう。私たちの計画書の装備欄には「帽子&目出帽」とプリントされているが、暖かい季節には、目出帽は二重線で消して帽子だけを持って行くようにしている。

以前、小学生だった子どもの手を引いて、インド北部の「花の谷」を訪れたことがある。4000mに

ちよつと足りない標高だったが、谷一面を埋め尽くす花を眺めながら、朝の光とひんやりとした空気の中をTシャツ一枚で歩くのは心地よかつた。途中から数人のインド人のグループと一緒に歩いたのだが、彼らは厚手のセーターを着込み、何人かは目出帽をかぶっていて驚いたことがある。「さわやかな空気ですね」と言ったら、「どこがさわやかだ、コールドだ」と返事が返ってきた。どこで目出帽を使うか、というのも個人差がある。



手袋

手袋。岩登りの確保用に、ノーメックスという熱や摩擦に強い繊維の手袋を使っていたことがあった。甲の部分に「NOMEX」と青い字でプリントしてあるのを除けば、見た目は軍手とほとんど変わらない。それでいて値段は軍手よりはるかに高価である。ある日、家の物置棚の箱の中に、何双かの軍手と一緒に、丸めて放り込まれているのを見た。カミさんに、「ひょっとして、コレ、庭の草取りに使った?」と、尋ねたら、「うん、使ったよ」

それがどうしたの? とでも言いたそうな返事が返ってきた。ない、ない、と思っていたのだが、やっば

るのも少しは快適になる。テント場で、他のテントと行き来したり作業するときには、条件にもよるけれど、カップだけで動き回るよりは傘をさした方がはるかに合理的だ。折りたたみ傘の使いみちについてはこれだけではない。前にも触れたけれど、日傘の代わりに「目隠し」にもなる。ビバークの際にツェルトの中で広げれば、固定したスペースを確保することもできる。



防寒具

防寒具。標高が1000m上がるごとに気温は0.5℃〜0.6℃下がり、風速が1m増すごとに体感温度は1℃下がるといわれている。木曾節に、木曾のなあ中乗りさん、木曾の御嶽山、ナンジャラホイ、夏でも寒い、ヨイヨイヨイ」という一節がある。御嶽は昨年9月の噴火によって多くの死者・行方不明者を出し、まだ登山規制がなされているが、古くから多くのひとたちに崇められ親しまれてきた山だ。木曾御嶽の最高地点は剣ヶ峰の3067m。海拔0mで30℃の気温でも山頂部では15℃、2〜3mの風速で風が吹いただけでも体感温度は12℃くらいになる。夏でも寒い、というのは科学的根拠がある。

算すれば、夏でもけつこう寒くなる可能性があるとわかる。風雨などの場合には雨具の下に一枚着込むことで生死を分かつことも、過去の事例が教えてくれている。いつでもどこでも、防寒具は用意しておく、ということがだ。「防寒具」という商品があるわけではないので、ウィンド・ブレーカーとかフリースとか、ダウンとか、行動しているときに着用する衣類以外に保温、防寒のできる衣類をザックに入れておくようにしたい。厚手のものを1枚よりは薄手の重ね着のできるものを2枚とか3枚にした方がかさばらないし重量も軽いはず。しかも重ねる枚数によって体温調整もできる。忘れずに持って行こう。



今回は衣類を中心に考えてみた。最近はまだ開きがなくなってきた。平地で使えるものがすべて山で使えるとは限らない、山で使えるものは下界でも使える、ということがいえそうなので注意してほしい。ただ、なんでもあんなにデザインや色遣いがいいまいちで、ダサくて似たようなものが多いんだろう?